

十郷用水における

近世的用水管理体系の成立

西 節 子

はじめに

一、十郷と十郷用水

二、近世的村の成立

1 本百姓体制の成立

2 下番村の用水変化

三、近世的用水管理体系の成立

——郷的結合から村組合へ——

四、大連家の動向

むすび

はじめに

31

本論の主題は、越前国坂井郡のうち六万六千石余を灌漑していた鳴鹿大堰下の高棕郷・磯部郷・十郷のうち、特に三万五千石余の十郷における近世村落の動向を通して、近世での用水関係の発展をみてゆくことにある。生産共同体

としての近世村落の成立を基礎づける用水事情はどうであったか、そして近世村落の成立後、それがどのように進展していくかを用水関係を中心として考えてみる。

用水は、もちろん米作農業において主要な生産手段であり、用水のあり方は農業における生産共同体のあり方と密接に結びついているといえよう。したがって本稿は、十郷用水の管理・運営上の問題を分析するとともにそこにあらわれる村落共同体関係の究明を行なうものである。

この考えに沿って、近世初頭での郷の中からの村の成立は、生産関係のどのような変化に基づいているか、更に成立後の村が、どのような形で結合・発展してゆくかを追ってゆきたい。ここでは用水を中心とするので、近世的用水管理体系の成立が問題となる。

一、では、十郷用水の地理的概要と共に、その発生の歴史的事情を通して、中世後期における十郷用水のあり方を考えてみる。二、で、近世的村の成立を具体的に考察し、三、ではその村成立後の動きを十郷用水系全体において捉えてみる。四、では十郷用水の井奉行であった大連家の動向をみることによって、用水体系の変容をおさえてみたいと考える。

一、十郷と十郷用水

ここでは、十郷及び十郷用水の地理的狀況と、その中世における形成・発展過程を概観する。

十郷とは現在の福井県九頭竜川の下流に位置した、本庄郷、新郷、大味郷、溝江郷、細呂木郷、大口郷、新庄郷、兵庫郷、関郷、荒井郷を一括した、中世に起源をもつこの地方の総称である。奈良興福寺大乗院は九頭竜川下流に河口・坪江庄という有力な財源である庄園を構えていたが、この十郷はそのうち河口庄に形成されたものである。

文政十一年（一八二八）に書かれた『越前国名蹟考』（福井県郷土叢書 第五集）によれば、

関郷二村・上関村・下関村

川口本庄三村・上番村・中番村・下番村

溝江郷九村・谷畠村・東善寺村・羽根馬場村・新用村・金津新町・南金津町・北金津町・河原井手村・稻越村

新庄郷三村・定旨村・上新庄村・下新庄村

荒井郷七村・（川口庄兵庫郷ともいふ）上兵庫（染田村・新宮村・小角村）・下兵庫村・井向村・荒井村・中野村

大口郷四村・蔵垣内村・大口東村・五本村・西村

大味郷二村・大味村・鯉村

とされ、十郷が現在のどの地域にあたるかをほぼ知ることができる。『越前国名蹟考』では、荒井郷と兵庫郷が区別されていないが、荒井村を中心として荒井郷が、また上兵庫、下兵庫村のある地域に兵庫郷があったらうことは容易に推測される。また新郷の記述がないが、慶長十一年と推定される『越前国絵図』⁽¹⁾における新郷の位置から考えて、現在の中浜村、玉木村、河間村あたりの地域と考えられる。⁽²⁾

十郷の地が米作可能の地となったのは、十郷用水の成立によっており、その用水の各々の江留の場所に春日社が建てられていたと考えられる。⁽³⁾ 周知のごとく「用水」とは耕作に用いられる水であり、「悪水」とは耕作に不用、有害な水であって、洪水時での悪水は耕地に大きい被害を与えた。十郷用水は当然用水導入のための水路であるが、一旦田地に引込まれた用水は、「田越」に地面の低い田地に流されていた。従って用水導入部に当たる地域は、用水入用時には最初に用水を利用することができ、洪水の際は下流の地域が、地高の田地より流れくる悪水で被害を受けていた。十郷が形成された頃の用水事情は、春日社が江留に建つという状況より考えて、春日社の建立されている地域（郷の中心部）で用水を引入れ、用水、悪水を周辺の田地に流し、用・悪水一応のまとまりをもって一つの郷が形成されていたと考えられるのである。

その後の用水の發達は、大江筋から小江筋（枝江）が次々と分れてゆき、郷の内部で小江筋の用水を中心とする生産共同体が形成されていったと考える。大連家「家秘簿」正徳六年（一七一六）の項で、野中村と野中新村が新たに十郷に加入したことが知られる。両村の田地は「古来々十郷こなれ水（田越水）を以養来候」という事情であったが、この年に「中浜村田地之内、中浜村へ有来候江筋通右之歩畝新規江筋為掘継」ことによって十郷加入を実現している。近世初頭において、この地方で村が郷の内部より自立・確立してゆく過程は、このような用水の發達に基づいていたのであろう。「十郷村々」とよばれて十郷用水体系を形成する村々の基本的な用水条件は、その村の田地が田越水で灌漑されるのではなく、十郷用水路が直接村に導入されたことにあると考える。

十郷へ加入した村では、十郷用水を運営していくための、鳴鹿・新明・横落役を負担することになっていた。「家秘簿」寛永十五年（一六三八）の「十郷横落長江間数寛」によれば、十郷内の四十四ヶ村がこの江掘に加わっており、従ってこの時期にはこれらの村々がそれぞれ独自の用水路を保有しはじめていた状況が考えられる。

しかしながら、十郷ではこの時期には未だ近世的村の成立は不完全であったと考える。今村盛次の「定」（慶長九年力）では「鳴鹿井関前々仕来候郷村へ無油断可申付候」とし、普請の主体が依然郷村に基礎をおいて考えられていたといえる。また先きの『越前国絵図』（慶長十一年）をみれば、他の地域が村名で記載されているのに比較して、十郷は郷名で示され、その郷結合の強い残存が知られる。更に寛永十五年の長江掘規定よりわずか十三年前、同二年には、秋山久庵、真杉所左衛門の、川北本庄組宛「免かけもち毛網之事」と題する書状が出されている（「家秘簿」）。

- 一、東ハ大道切、南ハ荒井村切同大田村切^(味)
- 一、西ハ中野浜切^(中ノ浜)、北ハ金津川切

右御免所之外御法度候間、罷出申間敷候。於相背者曲事可申付者也。

これによっても、当時の十郷の状況下では領主による支配単位として村だけでは把握しえず、郷による地域結合に依

存している様子が知られる。

このように、近世初頭簇生してきた十郷の村々は、ようやく自立をはじめたにすぎず、近世的村として成立するには種々の問題を残していたと考えられる。次に、その近世的村の成立事情を具体的に考察してゆくことにする。

二、近世的村の成立

ここでは本庄郷下番村を中心として、近世的村の成立事情を考えてみる。

1、本百姓体制の成立

まずここでは、近世における村落共同体の構成主体、用水を利用する生産主体について考えてみる。

天正十一年（一五八三） 同一の日付をもって、本庄郷宛に丹羽長秀と秀吉の禁制が出されている（東大連家文書）。その中「一、還住百姓成煩事 付・用・水・如・有・来」（丹羽長秀）、「一、還住百姓成煩事 付・小・屋・境・取・事」（秀吉）（傍点筆者）との記載がある。その他の部分は全く同一なので、傍点部分は同一内容の異なる表現と考えざるをえない。還住百姓とは、当時戦役に出た名主階層と考えられ、それら名主層が戦役から帰還した時、煩を成すことが禁じられたのである。傍点部分を考えるなら、名主層が在地を離れている際、成長しつつあった小農民がある程度自らの生産手段を把握し、占有を実質化していったこと、従って名主層の帰農に伴って煩の生じる原因ができていたと考えられる。用水をも含めた小農民の耕地の占有が名主体制を破って抬頭し、それが領主層の政策によっても裏付けされていたのである。名主より本百姓体制への移行の一端がここにみられると考える。

万治四年（一六六一）から貞享三年（一六八六）にかけての、中番村、下番村両村で生じた「宮後川崩一件」は、下番村における本百姓体制成立をより具体的に示している。事件の概略は、次の様である。

御宮地川崩。替地下番々中番へ四百四拾歩相渡候を、次郎兵衛、吉右衛門、三郎左衛門、中番高持居候処、延宝元丑

年中番地割仕候ニ付、最寄故右三人之高当りニ春日西ニ而結付可渡と申ニ付取置候処、下番十年斗以前取戻候ニ付不法之趣、畑井十年之斗代共都合相渡候様願書認、吉右衛門、三郎左衛門一所ニ可願旨相談候処、右兩人同心不仕、却而次郎兵衛方へ右之畑取込候様謀斗申候。次郎兵衛弱身を付込申候而訴訟仕候（「家秘簿」貞享元年）

万治四年春日社地内で川崩が生じ、新川地となった中村（田中々村の内）と番田村の地所の代償として、中番、下番両村より替地が出された。春日社が両村の惣社であったためで、この時中番村が一括して替地を代弁した。寛文十一年（一六七一）下番村地割の時、下番村の負担分を「宮の西」で中番村に渡したが、今度は延宝元年（一六七三）中番村地割の際、下番村の住民でありながら中番村内に持高をもつ大連等三人の持分として、「最寄」ということでこの宮西での土地が割当てられた。この中番村所有であるべき大連等三人の土地が、下番村内に取込まれ、大連より支払われるべき中番村への年貢が、下番村で保留されてしまったのである。次郎兵衛の「弱身」とは、延宝五年に次郎兵衛が組頭役を召上げられたことである。これによって「下番村之者共、与頭次郎兵衛ケ様之躰左右ニ罷成候上ハ、何事を申掛候共与毛御公儀様へ罷出間敷候間、是等も可取返と申、無躰ニ彼畠取申」（「家秘簿」）という下番村人の動きを招き、大連が不利な立場となっていたのである。「彼畠取申」とは、「併村人我儘ニ押取申畠之義ニ御座候へ、御納所ハ毎年我々共方々差上申候。無躰ニ作取ニハ罷成間敷」（「家秘簿」）との大連の主張から伺われるように、作人としての村人が、それまで年貢負担者であった大連を無視して、直接年貢を納めようとする動きを示している。貞享三年、訴訟の結果、下番村惣百姓五十人の連署による詮証文が大連次郎兵衛に渡されて、畠は取返されるのであるが、この事件を通じて、それまでの作人達が村の構成主体たる本百姓として、次第に抬頭している状況が知られる。すなわち本百姓体制に基づく近世的村の成立を示すものである。

では、用水のどのような状況が、このような本百姓体制を基盤とする近世的村の成立と対応するのか、それを下番村を中心にみてゆきたい。

2、下番村の用水変化

まず下番村の属する本庄郷周辺の用水の特徴はどうであったか。文化元年（一八〇四）と近世後期のものであるが、中番村の下番村に対する訴状（中番村、藤井家文書）の一部から、近世初頭の事情を推測してみたい。

其上東ノ方上番村^と私共方^江六ヶ所^と申惡水請候場所^有之。南之方ハ大味三ヶ村、惡水田越^ニ私村^江引請、剩^下七ヶ村之用水^当村御田地中^ヲ通候故、出水之節^ハ左右^江溢惡水^与罷成^并東江^与申^ス当村之用水^江も同様四方八方^ヲ押入候。

このように中番村へ「村々一面に馳来候惡水」は、今度は更に地面の低い下番村へ流れ込むことになる。下番村は更にその惡水を下流の河間村、玉木村、宮前村等にうけさせていた。この時期、近世後期に至っても惡水処理の問題が依然強く残されており、近世初頭には、下村が上村の惡水をどのように処理するかが、この地域の村の自立化と不可分に結びついていたと推測しうる。

今、村同志の用水出入りで、史料上比較的用水変容の経過を知りうるのは、上番村と中番村、中番村と下番村、下番村と河間村との関係で、惡水はこの順序で上番村から河間村の方に流れていた。今表Iと表IIでその出入りの様子を表わしてみた。全出入りのうち一九世紀に入ってから三件を除いては、すべて惡水処理についての出入りである。表Iはその出入りのうち、内済及び裁許という形で結論の出されたものについて、その概略を記したものである。これよりほぼ次の三つの時期区分が可能になると考える。

I期 一七四〇年頃迄

II期 一七四〇～一八〇〇年頃迄

III期 一八〇〇年以降

I期

表 I

	上番と中番村	中番と下番村	下番と河間村
I	天和3：地境の高低規定	天和3：早稲田用水中の橋で板樋→掛樋変える (新明保用水地境で原形できる) 中番村悪水吐中の橋間数覚 享保6：(早稲田用水確立)村境で大江より引水	天和3*：下番村悪水吐夫婦橋・元三江・七曲江橋を結ぶ村境道「つれなわて道」の高低規定
期	享保9*：上番村の一丁四反縄にある7ヶ所の悪水吐口ふさぐ	〃 8*：中の橋に手堰できる 早稲田用水の江縁と道の高低規定	享保12*：七曲り江に堰できる 今井田江へ下番悪水流すことの禁…蛸渡村の用水確立 (中番悪水→梨の木ふけ→大江の底樋→七曲り江で悪水流すこと決まる)
	寛保2*：上番村四反縄(中番村八反田)の地境規定	元文3*：中の橋手堰2ヶ所となる 下番地内の悪水吐江筋の両側に畔できる	〃 13*：下番村悪水吐・村境の高低規定 底樋に閥板入、河間への悪水減少 (ふけ中、高田への江筋できる)
II		寛延4：(下番地内ふけ中15間の私境道できる) 宝暦12：中の橋悪水吐江筋の深さ規定、これ以前は規定なし 安永4～6：下番地内悪水吐江筋の両側田地高くする 天明8：(下番字太郎丸(=古河)で悪水吐新掘) 寛政4：梨の木ふけ中道に置土	
III	文化10：中番村よりの堰がけの禁 上番より中番への江筋3本のうち2本は悪水吐として手指せぬこと	文化1～5：江戸訴訟 安永期までの規定固持し、かせ杭に打替 嘉永4～5：西江江掘について出入	文政2：他村へ迷惑かけぬ範囲で村内に江筋たてるとは自由とされる。(早稲田江延長) 天保11：地境は享保10の規定を守ること
期			

注) 年号右横の・印はその出入が組頭(後、大庄屋)布目村彦兵衛の囃によるもの

絵図 Ⅱ

下番村用水絵図（東大連家所有、嘉永3年「下番地図」より作成）

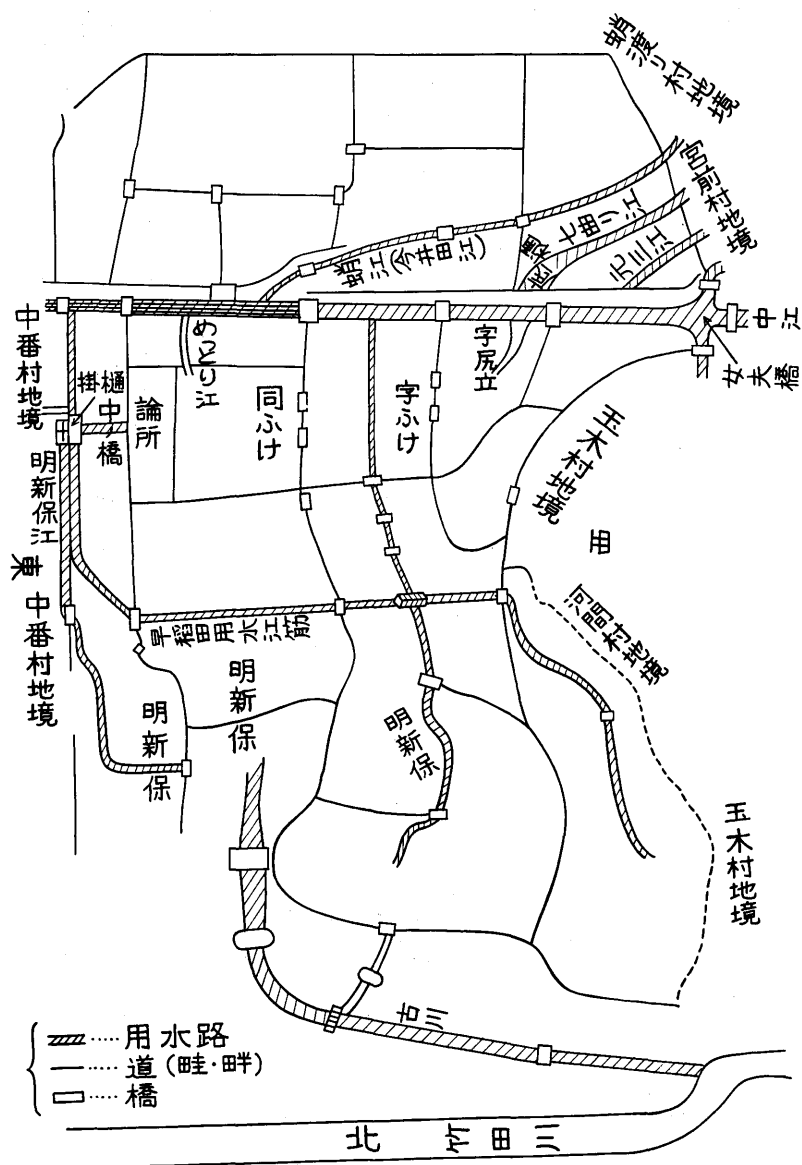


表 II

時 区	期 分	年	代	用水 件	出入 数	う 悪 水 出 入	ち 入	出入結果 のわかる もの	※ 下村有利	※ 下村不利
I 期		1660～(万治3～延宝7)		1		1		1	1	0
		80～(延宝8～元禄12)		5		5		3	3	0
		1700～(元禄13～享保4)		0		0		0	0	0
		20～(享保5～元文4)		6		6		6	5	(注1) (1)
II 期		40～(元文5～宝暦9)		2		2		1	1	0
		60～(宝暦10～安永8)		2		2		2	2	0
		80～(安永9～寛政11)		2		2		1	1	0
III 期		1800～(寛政12～文政2)		2		2		2	0	2
		20～(文政3～天保10)		1		0		0	0	0
		40～(天保11～安政6)		4		(注2) 2		2	1	1
		60～(万延1～明治12)		0		0		0	0	0

上記の数は主に「家秘簿」、東大連家、藤井家、下番区有の各文書により知られるだけの数を記した。

※ 下村有利…下村に有利な結果となったもの

下村不利…下村に不利な結果となったもの

(注1) 括弧内は2村の要求を折半したような形で事済になっている。

(注2) 悪水出入以外の2件は江浚に関する出入である。

この時期は表IIによっても出入りの数が比較的多かったようにみえる。

悪水が田越えに上村から下村へ流れ込むという事情のもとでは、村の自立にとって、村境の道(畦・畔)の高さと、村境にある悪水吐口(橋がかかっていたことが多い)の確定が重要な課題となってくる。悪水が一統田越えに無制限に下へ流れるのと異なって、村境が決まると上村からの悪水がある程度防止することが可能となった。上番村と中番村では寛保二年(一七四二)に、下番村と河間村では享保十三年(一七二八)に、地境及び橋の位置、高さを規定し、定杭及び分杭を立てて移動のな

いように寸尺を記録している。

中番村と下番村で常に論所となる悪水吐口の字中ノ橋は、そこから下番村が新明保田地へ用水を引いており、単なる悪水吐口とは異なっていたが、元文三年（一七三八）に、その用水のための手堰が二ヶ所、分杭で規定された。その後地境中ノ橋での状況に変化はなかった。

このように、この時期に村境が確定され、下流の村での悪水流入はある程度限定される。下番村と河間村天保十一年（一八四〇）の出入では、村境に関しては享保十年⁽¹⁾のこのI期の規定が用いられており、この時期が、近世的村の確立に重要な時期であったことがわかる。またその確立は、上村からの悪水を防ごうとする一貫した動きであり、常に上村が以前より不利な状況に甘んじることになった。この時期、悪水からの解放が、下村の上村との従属関係を減少せしめており、それが内済という形に表わされるように一般的な社会的動向として近村の村々に認められていたところにこの時期の特徴がある。⁽²⁾

II 期

上番村と中番村、下番村と河間村との用水出入は史料上見出されず、中番村と下番村のみで生じている。この時期は、村境確定期としてのI期の後をうけて、目立って悪水吐を防ごうとする動きはないが、下番村内では、中番村の悪水をうける「ふけ」⁽³⁾（深田）の中に道を設けたり、悪水吐の両側の田地を高くするなど、村内での悪水防止の強化の動きが出入りを起こしている。その内済結果は「此度置土之分致了簡、其儘指置」が、しかしこれ以後は了簡できない（寛政四年、藤井家文書）等、下番村にかなり有利な妥協的な事済になっている。

III 期

上番村と中番村の文化十年（一八一三）の出入りは、中番村より上番村悪水吐江筋へ「堰がけ」⁽⁴⁾したために起きた

ものであるが、内済では中番村の要求は全く認められなかった。また文化年間の中番村と下番村の一件は、江戸訴訟にまで及ぶ出入となったが、その裁許は元文、寛延年間の規定を基準とするもので、定杭、分杭はより朽損の少ない「かせ杭」に変えられ、Ⅱ期に下番村が分杭の朽損などを利用してなくずしに獲得していった権利が否定される。⁽¹¹⁾ 下番村と河間村の場合も、内済の基準を享保十年の規定に求めている。

上村と下村の間にある従属関係、それはここでは悪水処理の問題であったが、それが一八世紀を通じてある程度の解決をみるものの、このⅢ期に至ってある限界に達しているといえよう。

次に表Ⅱで括弧内で示したのは、下番村内での用水発達の状況を示すものである。下番村は十郷大江筋が直接村内を通っており、用水導入には問題は少なかった。これに比べて例えば蛸渡村では、その用水が下番村地内を通る小江（今井田江）で引かれるのであるが、享保十二年以前は独立した用水ではなかった。この年下番村と河間村の争いで、その今井田江では下番村の水戸口を塞ぐこと、つまり「用水之外悪水通シ申間敷候」とされ、これより以前の蛸渡村は、下番村の悪水路をそのまま用水路としていて独立したものではなかったが、この時期に独立した用水路として確立したのであった。

一方下番村では、主要な新保用水の他に天和三年に新明保用水（明新保用水）、享保六年には早稲田用水を設けて「用水」を充足させた。悪水処理は、中番村よりの悪水を防ぐ一方、泓を通る中番村よりの悪水を河間村との調停の上で、底樋を通して七曲り江に流そうとしたが、種々の規制⁽¹²⁾であまり成功しなかった。このため延享二年（一七四五）には、十郷江筋への悪水吐のための置樋二ヶ所の新設を願い出ている（「家秘簿」）。これが実現したかどうかはわからないが、天明八年には下番村地内字古河（古川）に悪水吐を新たに掘って、村内での改良を行っている。このような発展の状況から推定すれば、先きの出入の分析における時期区分に合せて、次のように区分できるのではなからうか。

Ⅰ期…十八世紀中期まで

大江筋（十郷用水路）及び他村との用水関係の確立。近世村落における用水路の概況形成の時期

Ⅱ期…十八世紀後半以降

Ⅰ期での新しい用水関係に伴う村内での調節・改良の時期。先きの古河での悪水吐や村内道の新設などがこれに当たる。

十七世紀後期において、下番村内で本百姓が確立してきた様子をみたが、その村落構成に基づいて、Ⅰ期では悪水による上流の村との従属関係を減少させながら、大江筋との一村限りの水利関係を確立させ、村独自の用水機構を形成させていった。更にⅡ期を含めて新明保、早稲田及び深田において、用水を調整し、耕地化させてゆくことで、生産力の拡大が達成されていったことがわかる（絵図Ⅱ参照）。

以上、下番村での事情を中心に述べてきたが、このような用水発展の方向は、下番に限らず十郷全体において成し遂げられていったであろう。

三、近世的用水管理体系の成立

——郷的結合から村組合へ——

近世初頭での用水路の分化—小江の形成は近世的村形成の基礎となった。そして二、でみたように、下番村を中心とした地域では悪水からの解放と共に、各村独自の十郷江筋との用水関係が形成されたのであり、近世的村はその時期を通じて完成されていった。ここでは、このような動きが、十郷用水全体にどのような変化を与えたかをみてゆきたい。

十八世紀に入ってから、十郷用水下の村々で用水路に沿った形で、数ヶ村の村々が結合する動きが多くみられるようになる。「江組」とか「用水組合」と称するものがこれである。表Ⅲは村と村との用水出入りの件数と、用水組合

表 Ⅲ

時区	期分	年	代	村と村の 用水出入	(a) 江組 による 水出入	(b) 江組 引水取 件数	掘極 (a)+(b)
Ⅰ		1660～(万治3～延宝7)		1			
		80～(延宝8～元禄12)		5			
		1700～(元禄13～享保4)		1			
		20～(享保5～元文4)		8			
Ⅱ		40～(元文5～宝暦9)		3	3		3
		60～(宝暦10～安永8)		4	0	3	3
		80～(安永9～寛政11)		2	5	8	13
Ⅲ		1800～(寛政12～文政2)		4	3	2	5
		20～(文政3～天保10)		1	2	3	5
		40～(天保11～安政6)		4	2	1	3
		60～(万延1～明治12)		0	0	2	2

上記の数は主に「家秘簿」、東大連家、藤井家、下番区有の各文書によって知られるだけの数を記した。

に基礎をおいた出入り等の件数とを比較したものであるが、一七四〇年頃より、用水組合を中心とした動きが活発になっていったことがわかる。

この結合は例えば溝江郷のように、狭い地域での数ヶ村のまとまりもあるが、関郷と溝江郷が合体して十数ヶ村の組合を形成する場合もある。しかし最も基本となるのは、下新庄村地内で分流する四本の用水路に沿った用水組合である。それらをまとめると、

西江組合…大口中、蔵垣内、西、中野、大

味、中番、下番、玉木、河間、本堂、

今市、藤沢、玉江、蛸渡、中浜、宮前

(十六カ村)

東江組合…蔵垣内、大口中、西、上番、中

番(五カ村)

轟木江組合…上関、下関、轟木、上番、東、大口中(六カ村)
金津江組合…上関、下関、南金津、稻越、河原井手、新用、馬場、東善寺、谷畠、金津新町、池口(十一カ村)
用水組合の諸活動は①江浚、江掘、②引水、③訴訟の三つに分類される。

① 江浚、江掘

これは用水の流れを順調にするために、春の植付前に各村が「丁場」という割当を与えられて、その土揚げや草芥りを行なうものである。これは旧来、大連の監督のもとで行なわれていたものであるが、十八世紀後半に至って、村別にではなく組合村々の連署の上で、江浚、江掘の取極めを行なうという新しい傾向がでてきた。江下の村々にとって、江上の村々の江浚、江掘の不徹底はすぐ水不足となって現われる。特に金津江筋では「私共組合用水路之義者、兼而御存知被成下候通、元来地高之江筋ニ御座候」（明治三年 東大連家文書）という事情で、特にこの要求が強かった。宝暦十三年（一七六三）この地域での「関郷、溝江郷（金津江組合）江浚取極一札」をはじめとして、この種の取極証文が多くみられるようになる。

その取極めも「用水大江筋前々々当り丁場毎年春中（大連家の）御指図を以江浚仕候」（明和二年、東大連家文書）という現状確認の取極めより、次第に積極的なものとなり、「一統相談之上惣掘熟談相整候」として「人足割附諸雑用」の取極めを行ったり（天保六年、東大連家文書、金津江の場合）、「掘始々掘終迄組合村々立会、耆人つゝ罷出故障申分も無之様」にする（天保八年、東大連家文書、轟木江の場合）ようになる。用水路の運営に農民自らが参加していく様子が知られる。

② 引水

引水は旱魃の際に各村々より引水願いが奉行所に出された。奉行役人の見分でその許可が決まると、上流に当たる村々に留水（用水取入口を塞ぐ）の配府が廻され、下村での引水が行なわれた。従って一つの用水系の村々の協力が必要となってくる。

江組引水究証文一札之事

一、朔日朝五ツ時々三日朝五ツ時迄

大口中村、蔵垣内村

一、三日朝五ツ時より六日朝五ツ時迄 東 村
 一、六日朝五ツ時より八日朝五ツ時迄 鯉 村
 一、八日朝五ツ時より十一日朝五ツ時迄 上 番 村
 一、十一日朝五ツ時より十六日朝五ツ時迄 中 番 村

二番廻り(略)

右者近歳古来稀成凶作ニ付何レ之村方茂大ニ行疲レ困窮ニ落入候処、近頃渴水之節ニ相成候得者、我先与御用水方五願出候而御難題をも不顧恐入候事、村々ニおるて格別之諸雜用方も有之、依之今般江組寄合及談爾趣法相立、組合村へ日限割附致相定申候。此上組合村引水順番當り之節へ、互ニ致吟味、決而江筋五相障申間敷候。右究之上ニ而不法致候村方於有之へ、組合も幾重之過怠被申聞候共違背致間敷候。為後証仍而如件。

天保十年亥四月 日 各村庄屋印(略)

(藤井家文書)

この例は異例の旱魃という特殊な状況のもとで行なわれたいわゆる刻限水の例で、この地域では旱魃はそれ程日常的ではないため、このような取極めはこの他に見出されないが、宝暦十三年(一七六三)南金津等五ヶ村の引水願などにみられるように、一村限りの引水願ではなく、用水組合を単位として引水願を出す傾向がみとめられると考える。

③ 訴訟

用水系における江下の村々の不利な情況から、下村々の上村に対する訴えという形が殆んどである。天明元年(一七八一)の下村十三ヶ村(金津江組合)と下新庄との出入りもこの一つであるが、下新庄は用水路の分岐点にあたるため、度々訴訟の対象となっている。その他、江浚や引水において、組合の取極めを守らなかった場合の出入り等が

ある。

用水組合を単位とする出入の発生は、当然①・②でみられるような諸活動を通して、日常的に村組合が定着したことを示すもので、逆にいえば、この種の出入り件数が多くなることは、組合結合の強まりを示すものである。

この近世的用水組合は組合村々の「一統相談」「江組寄合」の形によって運営されるが、これについては多言を要しないであろう。また対外的には惣代の村を設けていた。「家秘簿」寛政十一年（一七九九）の項に「十郷江掘方去ル辰年（寛政八年）兩年三郎左衛門年番⁽¹⁵⁾掘方見分、江方惣代村・触出に付古来無之儀初候ニ付、当年又候見分致度と江方申ニ付、無惣触出候処、四月十九日惣代村々十一人斗登。中ニも中番次郎吉甚やかましく申立、廿六日四五人再見分爲仕候」（傍点筆者）と記され、用水組合（江方）を代表する江方惣代村が十郷用水の運営に加わっていく様子がわかる。そして組合を構成する村と村との関係では、嘉永五年の西江組合の場合「是迄一鉢之人足指出し江掘仕候義者前各奉申上候通り、拾七ヶ村人足盛帳之上過不足勘定仕、組合村々御高割ニ仕候義、歴然之証拠ニ御座候。」（下番区有文書）として組合独自の「盛」があったことがわかる。「盛」とはいわゆる「万難」と同義であって、「盛帳」の語のごとく各村の十足、金銭の支出、分担等をきめることである。それは同時にそれを決めるための「寄合」の実現そのものを前提としている。こうして用水組合は、村を単位として構成され、盛の体制を整え、その中から江方惣代村を選んで用水管理機構を成立させていたのである。

このような十八世紀中期での用水組合による用水管理の成立、及びその後の発展は、それ以前の用水管理体系を次第に駆逐していった。

ここで十郷用水の一年間の運営はどのように行なわれていたかを一八世紀後半の事情で述べてみる（東大連家「用水御用記録」による）。

二月 十郷春寄合（横落堤普請に関する決定）

鳴鹿、新明普請所詔寄合（普請請負人、請負額の決定）

三月 鳴鹿見分登り

鳴鹿井口土俵入

四月 横落堤水戸合（築番組合）による普請

五月 鳴鹿藤杭請取⁽¹⁶⁾

鳴鹿大堰所普請

八月 横落堤井落寄合

十一月 十郷寄合（一年の横落堤運営に関する総決算のためのもの）

ところで、十郷の村々のうちで「格例の村々」とか「大高持の村々」とよばれる村が存在する。春と暮に行なわれる十郷寄合では、十郷の村々全部が参加するのであるが、「鳴鹿見分登り」及び「井落寄合」では、この格例の村々が招集される。

井落しとは用水が不要となる秋の刈入れの時期に、横落堤を崩して、水流を兵庫川へ流入させる工事であるが、その井落しの日については、井上と井下の村では意見が異なるので「十郷堤番人小屋^五井上下村々々庄屋共四五人程宛罷出相談之上」で定めるのである（「家秘簿」寛延四年）。大連家の「用水御用記録」は十八世紀後半期において詳しくいので、その時期について右の二つの寄合に参加した村々を表IVに示した。これによれば常時参加する村々は、福島、若宮、東長田、徳分田を除けば、それぞれ郷の中心として存在した村々といえる。上番、中番、下番は本庄郷、大味村は大味郷、上兵庫、下兵庫は兵庫郷、上新庄、下新庄は新庄郷、上関、下関は関郷と、郷との結びつきが明らかにされる。先きに述べたように、郷形成の要因として用水の発展をあげたが、その中心として存在した右の村々は、おそらく多くは村落の成立も早く用水事情も有利であったと考えられ、それは村高の多いことでも推測される。

表Ⅳ

		若宮	福島	東長田	徳分田	上新庄	下新庄	上兵庫	下兵庫	上関	下関	大味	上番	中番	下番	蔵垣内
(石)	村高	731	1073	1250	1146	1304	577	2820	2460	1550	1360	1720	2630	1900	1140	446
(a)	1758	○	○	○		○	○		○	○	○		○	○	○	
(b)	59	○	○	○		○		○	○	○	○		○	○	○	
(a)		○	○	○		○	○		○	○	○		○	○	○	
(a)	60	○	○	○		○		○	○	○	○		○	○	○	
(a)	62	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	
(b)	65	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
(a)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
(a)	67	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(a)	68	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
(b)	69	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(a)	70	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(b)	72	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(a)	74	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(a)	75	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(a)	80	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(a)	82		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(b)	83		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(a)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(a)	84	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(b)	85			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(b)	87	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

		河間	中浜	西	東	轟木	南金津	新用	馬場	東善寺	谷畠	合計	A	B	B/A
(石)	林高	808	1260	550	1930	350	1350	220	310	350	490				
(a)	1758				○							12	8	1	0.125
(b)	59				○			○			○	14	8	3	0.375
(a)							○					7	5	0	—
(a)	60	○	○									16	9	3	0.333
(a)	62									○		11	6	1	0.167
(b)	65				○							14	10	1	0.100
(a)												10	7	0	—
(a)	67									○		13	8	1	0.125
(a)	68	○			○		○		○			14	7	3	0.429
(b)	69	○										15	9	3	0.333
(a)	70										○	12	8	1	0.125
(b)	72			○		○		○			○	14	7	4	0.571
(a)	74				○						○	11	5	2	0.400
(a)	75				○	○						14	9	2	0.222
(a)	80				○		○					15	9	2	0.222
(a)	82	○			○		○					11	5	3	0.600
(b)	83		○		○		○			○		12	7	4	0.571
(a)			○		○		○					12	9	2	0.222
(a)	84	×	×		○		○				○	18	9	5	0.555
(b)	85				○		○			○		11	7	3	0.429
(b)	87	○	○		○		○		○		○	18	9	6	0.666

○印は寄合に出席した村々

×印は「河間・中浜不参内」とあるので参加権をもつものとしてBに合算した。

(a)は井落寄合の場合 (b)は鳴鹿見分登りの場合

A 格例の村々の内郷の系譜を引く村々の合計(若宮・福島・東長田・徳分田4ヶ村は例格の村より除外した。注17) B 格例の村以外の村々

格例の村々はこのような有利性から、用水管理の基盤が、郷的結合から村組合へと変化した際も、そのまま代表としての地位を留めていたと考えられる。しかし一方では、表IVで示されるように、持高も少く、寄合への出席状況も安定していない格例外の村々が次第に増加している。用水組合を基礎とした江方惣代としての立場が、これらの格例外の村々の寄合参加を可能にしていたと推測するのである。

このような郷的結合を基礎とする用水管理の漸次的解体の方向を、更に横落堤築番組合についてみてみたい。

舟寄村地内にある横落堤は、先述のごとく兵庫川の水流を堰止めて、十郷用水を十郷の村々へ導くという重要な堤であり、毎年春に行なわれるこの堤の築立は、十郷用水関係の行事の中で最も重要なものであった。十八世紀後半期において、この築立は三つの村々の組合せによって三年毎の交替で行なわれていた（東大連家「用水御用記録」）。今、安永四年（一七七五）より同六年の組合せをみると次のようである。

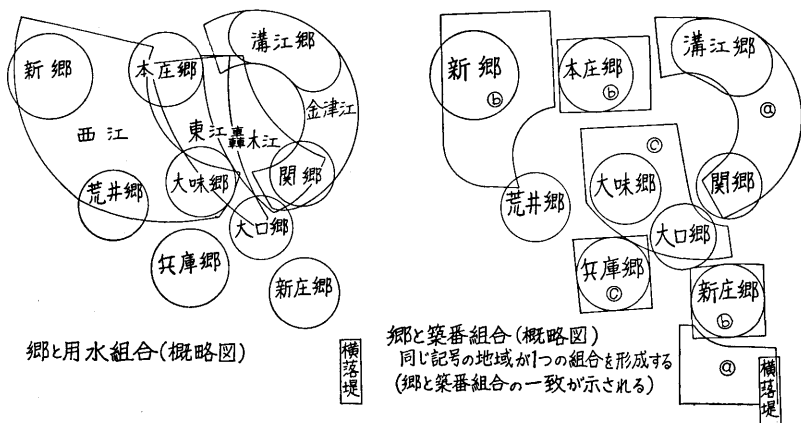
安永四年…(a)上方、福嶋、東長田、徳分田、若宮、下方、下関、池口、河原井手、稻越、新町、南金津、新用、馬場、東善寺、谷畠

同五年…(b)下方、上番、中番、下番、上方、上新庄、下新庄、玉木、宮前、河間、中浜、本堂、今市、藤沢、玉江、蛸渡

同六年…(c)上方、上兵庫、下兵庫、下方、大味、中野、西、東、蔵垣内、大口中、五本、轟木⁽¹⁸⁾(a)(b)(c)は図Iで使

用)
安永四年の組合せは、上方が横落堤より御定水閘の間で十郷用水を引く村々で、下方は金津江口で分流した用水系に沿う村々で関郷と溝江郷の組合せ。同五年は下方が本庄郷、上方が新庄郷と新郷、同六年は上方が兵庫郷、下方が荒井、大口、大味三郷の組合せとなっている。郷的結合は必ずしも近世用水体系に矛盾するものではなく、関郷と溝江郷（金津江組合）の結合のように、一つの用水系に沿う場合もある。しかし、上番、中番、下番の場合は異った用

図 1 (国土地理院 5 万分一地図より作成)



水系に組込まれているにもかかわらず、本庄郷として一つにまとまって築番に参加していたこと、また新庄郷、新郷の村々の組合せは郷の結合のみを基準にしているとしかみえず、更に、上方と下方の組合せには、地域的結合は全くないことが指摘できる。この、一方では用水組合という結合がでている状況の中で、依然郷的結合を基調とする築番組合は次第に矛盾をもつていったと考えられ、寛政七年(一七九五)に至って分立を生じている。(図Ⅰ) この年は安永六年で示した組合が築番に当たっていた。

指上申一札之事

一、十郷横落堤築番、従古来私共村々組合之儀、御定之通築番致、諸色指出水戸合仕候得共、近年於場所人足共彼是争論仕、水戸合はかとり不申候。依之当年之儀も又候右躰之儀杯出来候而ハ、御大切成用水水戸入弱ニ相成候義可有之儀ニ御座候。外村々と組替御願申上候得共、新規組替等相成不申段被仰聞候。依之双方組合熟談之上当年々築番当り上下と年番ニ仕度奉存候。(「家秘簿」、傍点筆者)

組替を願ったが聞入れられなかったとするのは、「家秘簿」に「一、天明六年四月、堤築番両兵庫ト相別レ度願、大味、大口郷と大連へ願出候へ共、先規も相定有之候を新規ハ不宜和順為致ニ付相返ス」

という井奉行大連の処理のことである。本庄郷と新郷、新庄郷とでつくられていた築番組合も、文化六年（一八〇九）上下の組合同志で争論が起こり、同九年には先きの両兵庫と荒井、大口、大味郷との分立と同様の理由で分立している。郷的結合を基盤とする築番組合は「外村々との組替」、又は再編成がなされなかった限り、分裂は避けられなかったものといえよう。

以上のように、用水組合という用水管理上の近世村落の結合体は、郷的結合体であった十郷の中から発生し、その郷的結合を次第に崩しつつ成長し、完成していった。こうして近世的用水管理体系が中世的用水管理体系にとって変つていったのである。⁽¹⁹⁾

四、大連家の動向

ここでは、近世を通じて十郷用水の井奉行（井守、井番ともよばれる）を勤めた下番村の大連家の動向を、先きに述べた十郷用水の管理体系の変遷という状況の中で把えてゆきたい。⁽²⁰⁾

大連家の井奉行としての地位は、慶長二年（一五九七）堀秀治の「定」（東大連家文書、本庄郷下番村百姓宛）で確認される。「十郷井水鳴鹿、横落堤普請之儀、如先規大連可申付候。為給恩現米式拾石毎年可令扶持事。」（傍点筆者）というのがこれである。大連家の由緒は十郷用水形成とともにあり、中世では本庄郷春日神社の神主としても、十郷用水管理に大きな権限をもっていたと考えられる。⁽²¹⁾

十郷ではこの慶長二年の段階では、郷を基盤とする中世的要素が色濃く残っており、依然村の成立は未熟であった。村支配を基礎とする近世領主が、用水支配を円滑に実現しようとする時、「如先規」といわれる地元での大連家の立場を利用せざるを得なかったと考えられる。大連が組頭を勤めうる地元での地位も、用水奉行任命に影響を与えたであろう。⁽²²⁾

この中世からの系譜をひく大連の井奉行任命の事実、この時期に一応近世での十郷用水管理体制を整えながらも、内実は依然として中世的要素が強いことを示し、近世的用水管理はこれ以後に展開することとなる。

大連家がまず直面したのは、先きにもふれた万治四年から貞享三年にかけての「宮後川崩一件」であり、大連家の地位の後退が示されている。この時、春日神社の神職についても問題が生じ、一応「只今次郎兵衛神主役仕罷在、其上御代々之御書物等所持仕、其外神主役仕志さい共有之候へ、永代次郎兵衛ニ被為仰付」という形で落着しているものの、この点でも大連家の動揺がみられた。

その後、貞享二年（一六八四）には、大連次郎兵衛と共に、上金屋村の三五左衛門、南横地村の七右衛門の三人が井奉行としてみえ、元禄二年（一七二三）には大連家内部で「相役三郎左衛門」がでて、東大連、西大連を含んで、井奉行四人制が成立する。鳴鹿大堰の普請運営については、この四人の合議制となり、十郷内部においては、同じ大連家ではあるが、二人が連立することとなった。これに伴って二十石であった大連家の扶持米は四石余に減少することとなった。

大連の井奉行としての役割は、まず鳴鹿、横落堤の普請、管理を最も重要なものとして、それに付随した日常の用水問題を処理していくことにある。これらにおいて、大連では、古法に準ずることを問題処理の基本としていた。例えば、延享二年（一七四五）に東長田村の七寸江口において、他村への分水が問題となった時、大連家はこの分水を認めず「古来々之定法委細ニ不申上候而へ、私共役筋ニ相背候」と用水奉行所へ述べている。この態度は、在地の動向にかかわらず、ほぼ一貫してとられた態度である。しかし明和四年（一七六七）に起きた「築出入」では、古法に依拠することが限界にきたことを示している。この事件は、丸岡藩の井奉行である金屋三五左衛門と預所楽間村の争いで、十郷江筋での築掛けを「川法」に反するとして、その取除きを要求する三五左衛門と、用水不用期間、築崩を継続させようとする楽間村との争いであった。この時大連も川法を守る側で三五左衛門の主張に連署している。

「当年楽間村も新法ニ築もじり丈夫ニ致懸候故三五も罷越払申義ニ御座候。右川筋之義井口も末新法ニ少々之打杭等ニ而も為致不申川法ニ御座候。楽間村土地之川与申越候得共、田地へ楽間村御田地ニ御座候而も川筋へ太切之用水川ニ御座候。不用之節たり共新法張之義出来仕候而者、川法相破レ井口も末入交り之村数御座候へ、村毎ニ新法相企候而へ末々村々申分多ク罷成候義眼前ニ奉存候。左候へ、私共義上々様も御給米頂戴候而相動候役義之所詮も無御座」(「家秘簿」)として井守四人の連署がなされている。これについての領主側の判断は、川法などは存在せず、川法を主張する井守の態度は越権だとした。この事件で十郷の惣代が奉行所に召出され、意見を聞かれたのであるが、この時「右用水路川法杯と申儀も一向不存、一鉢築堀之儀へ秋式百十日以後用水不用之節之儀ニ御座候得へ、私共村之用水ニへ曾而相障り不申候間、以来二ツ屋村³⁾而築堀いたし候とも又者村止候而も私共村々におゐて相抱り候儀一切無御座」(「家秘簿」、明和八年)と述べており、井奉行大連の立場は、領主側よりも十郷の側よりも遊離した形となった。これにより「別而川筋川法も無之処、井役之者共不図存寄を以取斗候儀」(「家秘簿」)として、大連よりの詫証文が奉行所に出された。この事件で十郷を代表する意見としては、大連家の主張する「川法」よりも、十郷を代表する長畑村の庄屋彦右衛門と金津村立会役の吉右衛門二人の「十郷惣代」の意見が採用されたのである。この十郷惣代の抬頭する基盤となったのは用水管理体系の変容であった。

記録が残っていないので、その起源は確かめられないが、宝暦八年には、春と暮に開かれる「十郷寄合」があったことがわかる(東大連家「用水御用記録」)。「十郷寄合」に象徴されるような、十郷における近世的村の成立を基礎とした近世的用水管理体系の成立は、先きに述べたようである。このような状況の下で、築出入での十郷惣代の出現が可能となったのである。この後大連は、これら十郷用水組合の総括者としての立場に移らざるをえなくなっていたといえよう。同じく宝暦八年「用水御用記録」では、鳴鹿大堰普請の十郷内部での負担を示したもので「寅年鳴鹿掘堰賃、高百石ニ付四匁五合つゝ、三分銀共」という記載がある。この三步銀については、その後同様の記載で「役

銀三步共」とあることより、これは井守大連の取分となることが知られる。また寛政二年（一七九〇）横落堤築立普請が一部請負制になったが、その時「一、銀五百匁 大連彦兵衛。是、横落堤入用請負ニ相成候ニ付新規為堤役料相極申候」（東大連家文書、「十郷横落堤年中諸事極帳」として、五百匁の大連への役料が設定された。このように、大連は報償の面からも、農民の立場に組み込まれていたといえよう。こうして十八世紀中期、近世的用水管理体系の成立は、大連の井奉行役をも、近世的性格に転回せしめたものと考ええる。

その例では、寛政九年「家秘簿」によれば、「横落盛合三郎左衛門方、受負西村喜兵衛。十四村組合大味ニ而内盛合前方ニ致置、庄左衛門其外五百匁之役料相潰申候。右申立ハ、三郎左衛門野中村へ引水為仕、組合村々へ断も無之御申立。」と記されている。引水の場合は、村より引水願が出され、大連が奥印をおした上で領主の許可を求めることになっていたが、この時、大連が他の組合との連絡をとらずに野中村の引水を認めたとして抗議され、組合村々により五百匁の役料不払いにまで及んだことを示している。これは用水組合を通じて結束を強めている村々と、その上に立ってしか用水管理を果しえなくなっていた大連家の立場を示している。

享和三年の「由緒書付」（「家秘簿」）によれば、大連家の下番村での位置は、「村高も式拾石、三郎左衛門拾六石を乍忝所持仕候処扨シ作ニ仕、御百姓業ハ不仕」というものであった。享和元年「家秘簿」では「大連三郎左衛門、早稲物を深へ植付候ニ付、村法度背深九拾歩之斗代過料として指出ス。村方ハ御代官所へ達出候処、興源寺同役彦兵衛同行弥右衛門、孫左衛門を以相咤、右両人ハ村方へ一札渡済。」という事件も起っており、村内での地位も決して優越したものではなかった。一方、大連彦兵衛の方は、寛政九年（一七九七）福井藩主が下番の近くへ浦方巡覧に来た際、春日社へ招待し謁見を実現し、文化元年（一八〇四）には年頭御礼に金津の茶屋（藩の出先役所）出入願い、文化八年預所役所での椽上願を認められるなど、一連の領主に対しての接近活動を行った。そして、文政元年（一八一八）福井領が二万石加増となり、翌年藩主の新領巡覧の時謁見を許可され、同四年には「其方儀今般新御領大庄屋被仰付

候。」との任命を受けている。⁽²⁵⁾この地方役人としての大庄屋役は、近世初頭大連家のもっていた權威とは全く異っていたと考えられる。この時、同時に大連が勤めていた井奉行という役割も、この地方役人としての大庄屋役と相応した性格をもっていたものであろう。

明治五年、西江組合より願書で「大連義従来井番頭役を蒙り罷在、都而万端心得居候者ニ付、元用水御奉行様御見分之上引水被仰付候処、今般大連へ御任被仰付難有仕合奉存候。」(下番区有文書)といわれるだけの要因は、以上のような井奉行大連の、用水体系をも含めた近世的状况に沿った形での変容なくしてはあり得なかったものと考ええる。いいかえれば、大連家の立場は中世的用水管理より、近世的用水管理(近世的村の結合体による合議制)の立場へ変容せざるをえなかったのである。

む す び

本論は、中世的用水管理体系から近世的用水管理体系への変化を、近世的村の成立と関連づけてとらえようとした。

まず、十郷と十郷用水の概要を示した。(一)この十郷において、近世的村の成立を、本庄郷に属する下番村の動向を通じて、一七世紀後半に求め(二)、それを基盤とした用水組合の成立、近世的用水管理体系の成立を一八世紀中期に置いた。近世的用水管理体系は中世的用水管理体系の残滓を払拭していったのである。(三)十郷の井奉行大連は、中世的要素(郷的結合)の残る十郷において、近世領主の政策上の妥協の上で位置づけられた。その大連家においても、近世的村の成長に伴う近世的用水管理体系の成立に伴って、井奉行の性格を近世的なものへと変えざるをえなかったのであった。(四)

本論では、近世的村の特に生産共同体という側面を通して、近世的用水管理体系の成立を述べてきた。これは、生産者農民の側において、用水をめぐる生産関係を発展的にとらえようとしたためである。しかしながら、近世的用水管理体系の成立は指摘し得たが、その後の、いわば近代化への指向をその中から見出すまでには至らなかった。この地域において、幕末から明治にかけて、用水組合を基盤とした農民による自治要求は強くないと思われる。用水問題がもつ特殊性もあろうが、それ以上に、私自身の能力不足で、農民側からの近代化の方向を見出せなかったというべきであろう。この点での追求を今後の課題としたい。

注

- (1) 『越前若狭地誌叢書上』所収。杉原丈夫・松原信之共編（松見文庫）
 - (2) 細呂木郷は、近世においては十郷用水系に含まれないので略した。
 - (3) 十郷用水の起源については、十二世紀において、庄園領主であった興福寺の勸農策の一環として設立されたといわれ、十郷の各地に春日社が建立された。本庄郷にある春日社（現在中番村）がその本基であるとされている。この用水は鹿の先導によつて江筋が掘られたと言伝えられているが、そこに「彼鹿ツイニ本庄ノ春日社ニ至テミヘズ」（『越前国名勝志』前掲、越前若狭地誌叢書所収）とあり、江留において春日社の建てられたことが知られる。その後「本庄村・宮崎村・大味村・溝井村・荒井村・大口村・細呂木村・新庄村・兵庫村、関村十ヶ村ニ社塔ヲ造立シ」「是ヲ十郷春日社ト云フ」という経過があった（『越前拾遺録』同地誌叢書所収）。それぞれの春日社の位置は、文政七年の十郷用水絵図（絵図一）によって、各江筋の江留に建立された様子を知ることができる。
 - (4) 十郷起源については『新考坂井郡誌』三〇五～三一六頁に詳しい。
 - (5) これは、近世を通じて井奉行を勤めた下番村東大連家に残された秘伝書である。万延元年大連国政が古記録をもとにして作成したものであり、天正六年から天保七年までの十郷用水に関する主要な記録を載せている。
- 十郷用水を引くために、東古市村内で鳴鹿大堰、樋爪村内で新明水閘、舟寄村地内で横落堤を設けていた。（福井県史第二巻三〇五頁参照）その普請費用の負担である。鳴鹿大堰の普請はその用水下の高棕郷・磯部郷・十郷の三郷で行なわれるが、

- 近世初期には、大堰に近いということで高稗郷が人足役を、磯部、十郷は井料米の負担で普請が行なわれていた。それが近世中期には普請が鳴鹿村等の請負に変化している。普請の負担は領主別による領割と三郷に分ける郷割がある。いずれも基本的には高割りで負担が決定されたが、農民負担たる郷割の分は更にそれぞれの郷内部で村毎の負担として決定された。大道とは金津往来道を示す。これで示される地域は、本庄郷を中心とした地域である。
- (6) この享保十年の文書は残存していない。
- (7) 表一で・印をつけたものは、布目村（堀江）の組頭（後大庄屋）彦兵衛の唆による内済であった。彦兵衛がこの一書を境に姿を消しており、村成立の社会的状況と組頭職の消滅とが、何らかの関係をもっていたと推測するのである。
- (8) 悪水吐口に堰をたてて、水流を止めること。
- (9) かせ杭とは、杭木に十文字に貫を通したものの。（文化五年、東大連家文書）
- (10) 例えば、中ノ橋悪水江筋の江掘の時の揚土の処理の場合は次のようであった。安永五年では「下番村申候通、（江筋両側の）田面も流落低く相成候ハ、田庄へ入申儀ニ候」（下番区有文書）であったものが、文化六年の裁許では、揚土は田庄に積んではならず、「両村地境論外の場所」へ持運ぶこととなった（同区有文書）。
- (11) 早損の場合と洪水の場合とで、七曲り江口の開閉・底樋口の開閉に関する詳しい取極めがあった（藤井家文書）。その後、底樋に関板を入れるという河間村の要求が認められ（享保十一年、下番区有文書）下番村の悪水は一層流れにくくなった。
- (12) 福井県史第二卷二九二―二九三頁参照。
- (13) これに上番、森木を加えて十三ヶ村の組合となる場合もある。
- (14) 井奉行大連家は後に述べるように東大連、西大連と両立して役務を果していた。その後寛政四年より年番制となり、隔年交替で勤めた。
- (15) 鳴鹿大堰普請材料の藤杭は、領主側より毎年十六石余（藤杭代米）が山竹田村等五ヶ村に支払われ、山竹田等より鳴鹿へ運ばれた。その藤杭を受取る行事である。
- (16) これ等の村々は上流部に位置して、十郷内部では特殊な地位を占めている。例えば「福嶋村、東長田村、徳分田村右三ヶ村（横落堤普請の際）人足割不相懸、急満水之節馳掛人足相勤申候」（東大連家「鳴鹿堰所諸物帳」とある。従って郷的要素以外で格例の村々になっていると考え、分析より除いた。
- (17) 築番に当った組合では、普通の普請の時で（年によって多少の差異がある）高百石二付「人足二人、土俵二十、杭木一本、

むしろ半枚、なわ一把」ほどを負担して築立普請を行なった。

築番組合での上方と下方の区別は普請場所の分担を示すものかと考えられるが、確かではない。

(19) 図1参照。これによって、用水組合成立の後においては、郷的結合が崩れざるをえない様子がうかがわれよう。

(20) 喜多村俊夫『日本灌漑水利慣行の史的研究』(岩波書店) 第六章第一節参照。

(21) 明治十年、「春日神社由緒書」下番村、藤野家文書。これによって大連家の由緒を要約すると、

春日神社の十郷への勧請にともない「勅使中納言時実并奈良興福寺ノ衆徒伊予法眼及大連ヲ神輿ノ供奉トシテ越前ノ本庄へ下向」させたが、この地は用水がなく米作が不可能であった。「之ニ依テ私家先祖大連国等、大連教榮ナル者水ヲ得ンコトヲ春日明神に祈請ス。然ル処明神納受」があつて、鹿の先導で用水が開発された。「漸々田地ヲ開キ悉ク水田ト成」、「依テ私共両家先祖ヨリ代々春日神社祠職并十郷用水役兼務罷在候」、とされている。

(22) 大連の組頭役については2-1でふれた。「家秘簿」「寛永拾五年組頭ませ割物高家」によれば、「組下、西村・王見・森木・新用・馬場・東善寺・反白・上番・中番・下番・宮前・竹松・宿・米ヶ脇・安嶋・崎浦ノ十六ヶ村」とあり、この頃大連がこの地域で組頭という役をになつていたのではないかと推測される。

(23) この時の出入りでは、楽間村と二ツ屋村の築旗がからまって問題となつていた。

(24) 夏の洪水による「水戸切」が生じた際、その補修普請を請負にしたものである。それ以前は、十郷全体での総普請とされていた。

(25) この時、大庄屋役の対象となつた村々は、下兵庫・中野・徳分田・東長田・大針・中筋・定旨・河合鷺縁・山室・高江・西二郎丸・東二郎丸・遊応寺・藤鷺縁・西長田の計十五ヶ村である。その後、安政四年に更に組替がなされている。(東大連家「用水御用記録」)